慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会階級論の一考察
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1928
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.22, No.5 (1928. 5) ,p.587(1)- 644(55)
JaLC DOI	10.14991/001.19280501-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19280501-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田學會雜誌　第二十二卷　第五號

社會階級論の一考察

加田哲二

一

數十萬年に渉る人類史において、人類は常に集團的生活をなして來た。近世社會思想史上に重大な意義を有する自然法學説における孤立人の存在の主張は單なる社會構成の説明過程における一假定としては、それを承認することが出來るけれども、歴史的事實としては、その存在を主張すべき經驗的事實並に論理的根據が存在しない。かくの如くして、孤立人の假定は孤立的家族によつて置き換へられた。(註一)然るに人類最初の社會形態としての家族の存在もまた否定せらるゝ

塾生諸君に告ぐ
御制服は總べて
秋山へ!!!
スタイル優秀
期日正確
慶應義塾制服御用
秋山洋服店
芝区三田四國町六、電話高輪五八一九
(豐國銀行横)

スバラシイ着心地
井筒屋の洋服
慶應義塾御用
三田大通リ
井筒屋洋服店
電高輪三三四三

に至つた。原始的社會形態は家族にあらずして、群團（ホルド）である。三四十人の男女から成る一集團が一定の地域を定めて、漂泊し、植物性食料または畜類魚類を蒐集、捕獲する所謂蒐集經濟を行つてゐたものが、最原始的人類の基本的社會形態とせらるゝに至つたのである。（註二）かくの如く、原始的基本社會形態も孤立的個人は勿論のこと、孤立的家族よりは、その集團的性質において、大なるものであつた。この最原始的基本社會形態から、部族社會、古代都市社會の形態に人類の基本社會は進展するのであるが、かかる過程において、基本社會の構成員は自然的並に社會的原因によつて、同質的構成員から異質的構成員を包括するに至るのである。最原始的基本社會にあつては、同一基本社會における構成員の性質は殆んど同一、または近似した狀態にあつた。たゞ彼等の間にあつて、異るところは、性の區別と年齢の區別に盡きてゐたのである。老若、男女の別が彼等の基本社會における構成員としての區別を構成したに過ぎない。然もこの區別としても、群團の中においては、甚だ特筆すべきものと稱するほどのものではなかつたのであつた。たゞ年長にして、經驗を有するものが、全群團において、指導的地位を占めてゐるに過ぎなかつたのであつて、この指導的地位も、この指導者と爾餘の構成員との間における支配の關係ではなかつた。部族的社會においても、社會的區別に關する現象は甚だ顯著だとはいひ得ない。部族は氏族の聯盟的組織であつて、氏族は各、その代表者を有してゐたのであるが、この代表者の選出においても、氏族構成員の意思が、最も重要なる決定要素とせられたのであつた。乍併、この部族社會において、社會的區別は稍顯著なる發達を遂げるに至つたのである。奴隷の發生及び農業から手工業の區別がその主なるものであつた。部族社會の末期においては、奴隷と自由民とが對立し、有閑所有階級と勤勞無產階級の著しく發達するに及んで、部族社會は崩壞の運命を辿つて、古代都市社會が成立したのである。かくの如き過程の存することによつて、吾々は同質的基本社會構成員から異質的基本社會構成員への分化を基本社會發達の上において、主張することが出來るのである。基本社會の異質的構成要素は古代、中世、近代の基本社會に至つて、益々その程度を增加してゐることは史實の吾々に示すところである。（註三）

基本社會はその範圍を擴大すると共に、その內部においては、種々なる分化が行

はれる。この分化過程は基本社會構成員が例へ同質的なる場合においても、發生し得る。何となれば、基本社會内における構成員の行動は、基本社會形成の一原理と同じく、協働の經濟性、即ち最小の勞費をもつて、最大の効果を擧げるといふ能率關係によつて、左右せらるゝからである。基本社會の一構成員がある行動に出やうとする場合、一人の力をもつてするよりも、數人の力をもつてする方が得策であると考へられた場合においては、彼等は直ちに結合して事に當るのである。この場合この數人の結合は基本社會には屬しながら他に對して一の區別すべき集團を形成するからである。更らに基本社會が數種の異質的要素に分化するとき、同一の異質的要素内――例へば勞働者同志の間――及び、異質的要素間――例へば資本家と勞働者との間――に協働のための結合が行はれる。かく一の利益（廣義においける）を追究せんとする者の間における結合を團體と稱するのである。團體は自然的、發生的、愛情的團體と熟慮形成的、利益的、暫時的團體とに、テエニスのやうに分つことが出來るが、こゝでは一の利益を追究せんとする者の間における結合と解して置いて差支ない。（註四）種々なる目的を有する團體が基本社會内に發生し來ることは自然ではあるが、この團體は基本社會の進展と共に、增加して來る傾向を持つてゐるので、マックイヴァの如きは、團體の增加をもつて、近代社會における特徴とさへいつてゐる。（註五）

階級もまたこの團體の一種であることはいふまでもない。階級は基本社會構成員の縱の區別である。基本社會はその一定の發達階段に達すると、その成員を階段的に分つことを始めるのである。この發達階段の基本社會においては、その成員は一定の階段に分たれて、各々一定の地位を與へられる。この地位、即ち成員の階級的分岐は可動的のものと、不動的のものとある。從つて、一階級の他階級への服從並びに、支配が行はれる。その結果、階級支配の事實を擁護し、またはこれを破壞せんとする種々なる機關または運動が行はれるのであつて、歷史的事實としても、また現在の事實としても、このことは甚だ重要なる意味を基本社會に對して持つてゐる。從來の歷史は階級鬪爭の歷史であるとは、マルクス＝エンゲルスのいふところであるが、この見地に立てば、勿論のこと、斯くの如き見地に立たないまでも歷史上並に現在における階級問題の重要性を認識し得ないものはないと思

ふ。歴史並に現代における最も重要なる人類の問題は一方においては民族相互間の問題であり、他方においては基本社會内における階級間の問題である。而して、この二つの問題、民族征服及び獨立の問題と階級運動の問題とが、相結合し來れるところに最近の狀勢――例へば南方支那における民族運動と社會運動――が存するとすれば、階級運動問題は現代最大の運動中の一であるといはねばならぬ。筆者はこのさゝやかなる論文において、これらの大問題に對して言及しやうといふのではない。たゞ階級の本質を研究すべき一の資料として、マルクス＝エンゲルスの説を述べやうとするに止まるのである。

二

社會階級とは何ぞやの問題に關しては、現時においても甚だ異論が多いのであるが、この異論を二分すると二つの型態を採る。第一の傾向は社會階級の本質を客觀的事實または標識に求め、第二の傾向は階級の本質を主觀的要素に求める。この二つの形態の傾向を折衷する種々なる議論の存することは勿論である。

客觀的標識または事實として擧げられるものの中、最も顯著なるものは、財産または所得の大さである。この説によれば社會階級と所有階級とはほゞ同一なることを意味するのである。この説は學説發展的に見れば、最早舊時代に屬する學説ではあるが、現代においても、學者によつては、この學説を主張するものがある。ハンマッハアは階級（クラッセ）と身分（シュタンド）との相異は前者が所有の區別であり、後者が職業の區別であるとして、この説を主張する。（註六）シュパンもまたこの説を主張する。彼はマルクスが從來の歴史は階級闘爭の歴史であるとしたことをもつて、マルクスが所有階級に最大の意義を認めたといつてゐるが、この場合のシュパンの解する階級の本質とは所有の區別にあつたのである。たゞシュパンのマルクス解釋はこの場合當を得てゐるものではないのであるが、このことは暫く措く。たゞ彼が所有の差別を階級の本質としたことを指摘し得ればいゝのである。（註七）これらの人々と同じく所有といふ事實を社會階級の本質と見るのではあるが、所有なる要素に一の制限を加へることによつて、階級本質の客觀的標識を一層明瞭ならしめやうとする論者がある。オヴェルベエの如きはその一人であつて、彼は階級區別の本質を生産手段の所有または非所有に求めやうとするものであつて、カアル・

マルクスの資本論第三卷終末に未完のまゝで終つた社會階級本質論と最も近い、ものである。（註八）

また所得の高ではなくして、その種類の異同に階級差別の本質を求めやうとするものに、獨乙の加特教經濟學者のペッシェがある。彼によれば、今日階級といふのは、生活の經濟的方面に限定せられてゐるのであるから、そは同種の所得を獲得する經濟行爲の全體を指稱するものである。（註九）これと同じやうな見解は既に、シェフレによつて懷かれてゐる。彼によれば、階級とは、經濟的所有の同一によつて、生じたものである。階級は所得源泉たる所有の大きさ及び種類の相違から發生する。故に「階級とはその本質において、所有の大きさ及び所有の種類、即ち所有及び非所有の差異に從ふ區別である」。（註一〇）

次に折衷說に移る。この論者は大體において客觀的標識の必要を主張しながら一部分主觀的要素を採り入れんとするものである。即ち一特定階級所屬の本質的標識は一般狀態にありとするのである。この說を主張するものの一人はエデュアルト・ベルンシュタインである。彼は主張する。現代社會の階級は主として同一なる生活條件の下に生存する要素を包含してゐるのであると。（註一一）シムコウィチもこの說に近い立場にゐる。彼に從ふと、階級とは同一の所得源泉を有し、近似または同一の經濟的利益を意識してゐる團體である。故に社會階級は一の利益共同團體であり、經濟的利益を同一とする經濟的個人の觀念的團體である。（註一二）

マックス・ウエバアもまた社會階級の本質を客觀的標識に求めてゐる。彼は階級をもつて、同一階級狀態における人間の集團と解し、階級狀態を(一)財の生產(二)外的生活狀態(三)內的生活の運命の典型的機會に求めてゐる。而して、內的生活の運命は特定經濟組織內部における財及び行爲に關する處分權力の程度並に種類、所得獲得に對するその利用方法によつて、決定せらるゝのである。この見地に立つてウエバアは所有階級、營利階級、及び社會階級の區別を設け、社會階級をもつて、階級間の變換が個人的にも、世代的にも最も容易であり、最も典型的に行はれてゐる階級狀態と解したのである。（註一三）

次に擧げらるべきものは主觀的要素に階級の本質を求めんとするもので、この

場合の客觀的要素は甚だ輕視せらるゝのである。ハインリッヒ・クノオの如きは明白にこの傾向を示してゐる。彼によれば、社會階級とは經濟的發展過程における一產物であつて、當時の經濟形態から發生する利益共同團體である。（註一四）ゾンバアトはその「プロレタリヤ社會主義」並に「近世資本主義」において、このクノオと殆んど同一の意見を懷いてゐるのであるが、（註一五）「プロレタリヤ社會主義」の舊版たる「社會主義及び社會運動」においては、稍主觀的要素を强調してゐる。彼に從へば、社會階級とは一の社會團體であつて、その思想によつて、一の特定なる經濟組織を代表するものである。而して經濟組織とは、一または數多の經濟的原理を有する特定經濟秩序を意味するのである。（註一六）この舊著における階級論はその訂正版におけるものよりも、主觀的要素の多量なるものと見ねばならぬ。

この主觀的要素並に客觀的要素は折衷家グスタフ・シュモラアによつて集合的に採用せられた。彼によれば、階級とは分勞的社會における大なる團體であつて、同一または類似の性質及び生活條件、同一または類似の所有種類及び所有分量、國民經濟または國家の秩序における同一または類似の地位、階級的社會秩序における同一または類似の階等、同一または類似のすべての種類の利益によつて、同一所屬たる意識を有し、これを表現するものである。（註一七）

主觀的要素に階級の本質を求めやうとした論者は以上のやうに、思想及び、同一所屬の感情、同一利益をもつて、階級本質としたのであるが、これらの要素は意欲、思索、感情における主觀を問題としたのである。然るに、この主觀的要素の他の方面に階級の本質を求めんとするものがある。即ち共同の經濟的並に社會的狀態は同一所屬の感情、一定の階級意識、階級意思に表現せらるゝのであるが、この場合問題となるのは、外的評價の要素であるが、この外的評價の要素を階級の本質とする學者が存する。この種類の論者に屬するものに、ペッヒ及びフィリッポウッチがある。（註一八）

三

階級本質の決定に關する議論は以上のやうに錯綜してゐるのであるが、本論の主題たるマルクス＝エンゲルスの階級論においても、幾多の問題が存在するのである。このことは恐らく、社會現象としての階級が考察せらるゝこと甚だ少く、そ

の學説史的經歴においても極めて、弱年なるが故ではなからうか。勿論古代にあつても、社會階級としての奴隷は種々なる場合に評論せられたのであつたが、歴史における一の重要なる要素として階級が觀察せられたのは、近代の學的研究に屬する。而して歴史及び社會生活における一重要要素としての階級が觀察せらるゝに至つたのは、歴史の進行をもつて、一個人――即ち帝王または英雄――の行動意思に基くといふ所謂英雄崇拜的史觀から離脱し來つて、社會生活の諸要素の分析が始められた時代に屬するのである。而して英雄崇拜的史觀からの離脱はその最初において自然的環境の社會生活に及ぼす影響を強調する諸論者によつて行はれたのである。吾々は最も多くかゝる論者をラテン系民族の中に見出すのである。ジャン・ボォダン、ギャムバスチスタ・ヴィコ、モンテスキウなどはその代表的論者であつた。彼等は社會的事象の決定要素を自然の性質に求めてゐるのである。（註一九）然るに自然的環境の人間社會生活に及ぼす影響は消極的、無目的であるのは當然である。故に自然の消極的方面とは別に人間の積極的社會生活建設執行の方面が論ぜらるゝことは極めて、當然の成行でなければならぬと同時に、自然環境の偉大なる影響の認識は必然社會生活動因としての個人の勢力の過小なるを認識せしめないではすまないであらう。而して、近世初期からの社會的並に政治的諸運動が多く大衆的形態を採つたことは――近世初期の農民運動、宗教運動、及び第三階級的政治運動を見よ――個人の力に代ふるに集團的勢力の社會生活の動因としての重要性を認識せしめるに至つたのである。かゝる社會現象の認識過程において、第十八世紀の後半及び第十九世紀において、階級は一の社會生活上の重要なる要素たることが認めらるゝに至つたのである。而して、この階級の重要性は階級現象そのものに對して認められたのではなくして、換言すれば、階級の本質に關する科學的研究が行はれたのではなくして、實際社會生活における階級對階級の闘爭が認識せられ、これが歴史の推進力としての重要性が主張せらるゝに至つたのである。故に歴史推進力としての階級闘爭は自然環境史觀から社會的經濟的史觀への推移と共に起つたのであつた。この兩者はマルクスに至つて、唯物史觀と階級闘爭説とを綜合的體系に組織化せられたのである。故にマルクス説はこの點において、第十八世紀及び第十九世紀の社會學的思想の一

綜合と見ることが出來るのである。（註一〇）

その一先驅者と見るべきものに、アダム・ファグスンがある。（註一一）　彼は階級闘爭において、唯一ではないが、歴史進行動因の一現象形態を見たのである。勿論、ファグスンによれば、この闘爭は高度の國家的統一狀態においては終焉すべきものであるが、この闘爭の當事者は所有及び職業的區別から發生した社會階級的勢力に外ならぬのである。而してこの階級闘爭は自由的進歩的のものであるが故に祝福すべきものであり、從つて國家の任務は闘爭する階級の一が絶對的優勢を示して、專制または無政府狀態を發生せしめざるために、一階級の優勢となることを防止するにある。乍併、ファグスンの階級爭闘説においては、後代發展したやうな階級闘爭を唯一の社會發展の動因とし、歴史における階級闘爭をその不可缺の形態とし、辯證法的原理に從つて發展するとする特徴を缺いてゐる。階級闘爭を經濟的事實即ち財産所有者と無産者、資本家と勞働者の間の對立に求めやうとする階級闘爭の理論は伊太利の法學者フィランヂリにおいて一層顯著に表現せらたてゐる。（註一二）　彼に從へば、獨立の賃銀勞働者が所有者階級と宥和し得ざる對立狀態にあるのである。彼のこゝにいふ賃銀勞働者とは第一に農業的プロレタリヤを意味したのであつた。

佛蘭西の國法學者ジャク・ネッケル（一七三二―一八〇四）は階級闘爭説における重要なる學説を主張してゐる。彼は經濟的に有力なる階級が同時に政治的にも、支配的階級たることを主張した。彼に從へば、少數の人間が地球上に分布せられ、而して彼等は法律、殊に財産法を制定して、抑壓階級に對して自己を防衛するのである。然るに無産者に有利なる法律は存在しないのである。佛蘭西大革命の時代に及んでは、その急進的分子は階級闘爭論を高唱した。かくてマラアは個人の政治的態度は彼の物質的利益によつて決定せらるゝと見、從つて階級をば種々なる經濟的利益の負擔者としたのである。諸階級は相互に闘爭の狀態にあり、富者は貧者を搾取せんとし、貧者は富者の富を奪取する。たゞ闘爭のみこの對立狀態を解消することを得るのみで、他の手段は存在しない。故に階級闘爭は不可避であり、歴史の過程を決定する唯一の手段である。而して、シルヴェン・マレシャルによつて起草せられ、バブゥフによつて靈感を與へられた「平等者の宣言」は最も著し

くこの思想を表明してゐる。私有財産、財産の差異即ち經濟的差異が階級の起源である。而して階級は搾取者と被搾取者に分れ、富者は主人にして支配者たり、貧者は下僕にして被支配者である。而して支配者によつて形成せられた市民的政治並に宗教組織は現存の不正義を神聖化する以外の何等の任務をも有さない。彼の歴史觀に至ると極めてマルクス的見解に近いのである。原始的狀態は共産主義であつた。然るに私有財産は原始的平等を崩壞せしめ、社會を階級に分つた。社會の發展は必然的に原始的狀態に再び達するのである。何となれば、プロレタリヤの革命によつて、原始的平等、狀態を再建し、階級を克服して、無階級社會を建設するからである。

ジャコバン倶樂部の建設者バルナアヴもまた經濟狀態の變遷と階級秩序の變遷の一致を發見してゐる。原始的民主主義は土地所有の支配階級のために撤廢せられ、經濟的隷屬は封建制度の支配階級に對する貧者の政治的隷屬を招來するに至つた。小工業的勤勉、マヌファクトウル、商業及び工業的財産は社會の下層階級をして、經濟的勢力を獲得せしめ、政治における自由と勢力とを得せしめたのであつた。英國並に佛蘭西における革命は新民主主義を闘ひ取つたのである。

以上の數例を擧げたやうに、佛蘭西革命時代において、歴史上における階級現象の重要性が認識せられたのであつたが、佛蘭西革命自體は單なるブルジョアジイの政治的革命並に社會的改革に過ぎなかつたのである。かくの如くして第三階級としてはその政治的自由と共に經濟的自由を獲得したのであり、それのみで滿足したのであるが、爾餘の社會階級がそのために滿足しなかつたのは、諸史家の明白に說くところである。この社會不安の情勢を察して、社會發達の要因を深く研究し、佛蘭西社會學の途を拓いた人にサン・シモン伯がある。サン・シモンに從へば、階級として封建制度に對立し、千八百八十九年の革命において、封建制度と闘つて政治的權力を獲得したものは、社會的に有用なる勞働組織に參加してゐる勢力の全體、即ち企業家、技術家、手工業者、科學者、藝術家等の全勤勞者の全體であつた。サン・シモンはその晩年において、産業者階級の統一が市民（企業家團）と勞働者團との間の利害闘爭によつて傷つけられるのを見た。乍併、彼はこの場合新らしい階級闘爭の開始を豫言したのではない。この闘爭は平和的組織的に解決し得ること

を信じたのである。何となれば、世界史の辯證法的發展は既に産業組織において、完成せられてゐると信じたからである。而して、サン・シモンはその時代の決定的任務をもつて、産業組織殊に産業的組合による大衆の厚生への組織にありとしたのである。この實現のために、彼は「すべての國の産業者よ結合せよ」の標言をもつて、叫んだのである。（註二三）

四

マルクスはその社會主義理論を佛蘭西において、研究し完成した。故に以上のやうな學説の發展は當然マルクスがその研究過程において、研究攝取したのであらう。これらの研究に基づいて、彼はその階級鬪爭理論を構成した。而してエンゲルスによれば、「唯物史觀及び餘剰價値による資本家的生産の秘密の暴露との二大發見は、吾々はこれをマルクスに負つてゐる。この發見と共に社會主義は一の科學となつたのである……」（註二四）而してマルクス＝エンゲルスのいふやうに、「從來の全社會の歴史は、種々なる時代に種々に形成せらるゝ階級對抗において動いてゐる。この階級對抗が如何なる形態を採らうとも、社會の一部に對する他の部分の搾取はすべての過去の世紀における共通の事實である」（註二五）とすれば、餘剰價値の發見はとりも直さず階級鬪爭の發見でなければならぬ。階級鬪爭による社會の辯證法的發展に關する命題は「ダアウィンの學説が生物學に對してなしたところを歴史に對してなす」ものとエンゲルスは信じたのである。（註二六）エンゲルスの主張は彼のマルクスに對する絶大なる友情の發露であつて、科學的に見るとき半ば眞にして、半ばは少しく誇大に失する。かゝるエンゲルス以下のマルクシステンの誇張の言あるが故にマルクス學説の淵源に就いて種々なる批評臆説が行はれる。甚だしきに至つては、「共産黨宣言」のコンシデラン「社會主義原理」剽竊問題をさへ云々するに至るのである。（註二七）

乍併、階級鬪爭の歴史過程に對する重要性と社會改造運動における階級鬪爭の使命とを最も明確に論述した効績はこれをマルクスに歸さなければならぬ。彼の階級鬪爭説は從來の學説を綜合批判し、その新意義を發揚したものである。彼に從へば、すべての歴史は社會階級の鬪爭の歴史である。而して、社會階級は經濟的生産における産物であつて、同種の經濟的過程に從事する人々の特定團體であ

る。經濟生活における支配的階級は同時にまた社會階級として政治的支配、即ち國家における支配權を獲得する。故に國家は階級國家に外ならず、國家の制度と法律、否その全存在と作用とは、爾餘の社會階級に對抗して、支配者の權利の施行及び確保にある。然るに現在被抑壓階級たるプロレタリヤはその抑壓者に對する最後の闘爭において、經濟的並に政治的權力を奪取するであらう。かくの如くにして、プロレタリヤは社會階級として最後の階級であるが故に、階級は撤廢せられ、無階級從つて、無國家の社會が建設せらるゝのである。（註二八）「共産黨宣言」に從つてその重なる文章を引用すれば、次の如くである。

「すべて從來の社會の歴史は階級闘爭の歴史である。自由民と奴隷、パトリチエルとプレベイヤ、バロンと隷農、組合の親方と職人、これを要約すれば、抑壓者と被抑壓者とが常に對立し、あるひは隱然の、あるひは公然の不斷の闘爭を行つてゐる。そは、全社會の革命的改造をもつて、あるひは、闘爭しつゝある階級の共倒れをもつて終るべき闘爭である。……（註二九）

封建的社會の崩壞から起つて來に近代市民的社會は階級對立を止揚したのではない。近代市民的社會は舊時のそれの代りに新らしき階級、新らしい抑壓條件、新らしい闘爭の形態を作り出した、吾々の時代、即ちブルジョワジイの時代は、階級對立を簡單にしたことをもつて、特徴とする。全社會は益〻二つの大なる敵對する陣營、即ち相互に直接對立する二大階級ブルジョアジイとプロレタリヤに分れる。（註三〇）

封建制度を打破したブルジョアジイの武器が今やブルジョアジイ自身に向けられてゐるのである。而して、ブルジョアジイは彼等を死に導くべき武器を鑄造したのみでなく、彼等は、この武器を使用すべき人をすら作つた。そは近代の勞働者、プロレタリヤである。ブルジョアジイ即ち資本家が發達する程度と同じ度合で近代勞働者の階級たるプロレタリヤが發達する……。（註三一）

從來のすべての運動は少數のための、または少數者の利益における運動であつた。然るにプロレタリヤ運動は非常なる多數者の利益における非常なる多數者の獨立的運動である。現在の社會の最下層たるプロレタリヤは、公民社會を形成する階級の機構を破壞することなくしては、自らを發展向上することは

出來ない。（註三二）

「（革命）發展の過程において、階級的差別は消滅し、すべての生產は結合せる個人の手に掌握せられ、かくて、公的權力はその政治的性質を失ふに至る。本來の意味における政治的權力とは一般階級の他階級抑壓のためにする組織せられた權力である。プロレタリヤがブルジョアジイに對する鬪爭において、必然的に階級に結成し、革命によつて、自己を支配的階級となし、支配的階級として、强力的に舊時の生產關係を止揚する場合に、プロレタリヤはこの生產關係とともに階級對立の存在條件、階級一般を止揚し、これと共に自らの階級としての支配を止揚する。

階級並に階級對立を有する舊時の市民的社會の代りに、すべての個人の自由なる發展がすべての人の自由なる發展の條件となるが如き一聯合が起るのである。」（註三三）

これらの諸章句に現はれた「共產黨宣言」の根本的思想をエンゲルスは次の如くに要約してゐる。曰く「經濟的生產及びこれから必然的に發生する各歷史時代の社會的編成はその時代の政治的並に思想的歷史に對してその基礎を形成する。これに從へば、（原始的土地共有の解消以來の）全歷史は階級鬪爭の歷史であつた。社會的發達の種々なる階段における被搾取者と搾取者階級、支配者階級と被支配者階級間の鬪爭であつた。而してこの鬪爭は今や、被搾取、被抑壓階級（プロレタリヤ）が、同時に全社會を永久に搾取、抑壓、階級鬪爭から解放することなくしては、自らを搾取、抑壓階級（ブルジョアジイ）から解放し得ない階段に到達したのである」と。（註三四）

五

マルクス＝エンゲルスは以上のやうに明白に階級鬪爭の意義を說いてゐる。而して彼等の階級鬪爭論はその社會學說における中樞的要素を形成するもので、この中、近代社會におけるプロレタリヤの地位を最も重要視してゐるのである。これあるが故にマルクシズムは屢、プロレタリヤの階級的學說といはれてゐる。オッペンハイマアは次の如きジャン・ジョレスの言葉を引用していふ。「『その時代の批評のすべての攻擊及び猛烈なる排擊に抵抗し、社會主義思想と勞働運動と

を孕み、兩者を結合したことはマルクスの最も顯著なる效績にして、恐らく唯一の效績であらう。』この言葉は最も肯綮を得てゐる。マルクスが當時の階級鬪爭の狀態が甚だ必要としてゐた階級學說をプロレタリヤに供給したことは彼の歷史的效績であると共に、彼の偉大なる影響の原因でもあり、彼の體系の內部的弱點の原因でもある。マルクスがその天才をもつてこれらのプロレタリヤの階級學說を打ち立てたことによつてのみ――このことはマルクシステシの反對意見のあるにも拘らず、大衆に對する影響の原因ではなくして、反つて、障害となつたものと自分は信ずる――この巨大なる影響は存する。このことによつてのみ、彼は全世界の階級意識を有するプロレタリヤの神聖なる指導者となつた。このことによつてのみ、彼の資本論はプロレタリヤの聖典となつたのである」と。（註三五）シシコウィチも「全體としてのマルクシズムは一の階級的教義即ちプロレタリヤの教義である」といつてゐる。（註三六）

マルクシズムが一の階級學說たることは、必ずしもマルクシズム批評家を俟つて知るべきことではない。エンゲルスは共產主義とは何ぞやの問に答へて「共產主義はプロレタリヤ解放の條件に關する學說である」といつてゐる。（註三七）同じエンゲルスは「英國勞働階級の狀態」の英譯序文に共產主義の階級的性質に關して次のやうな明瞭なる說明を加へてゐる。「本書の哲學的、經濟學的、政治的の一般的理論的立場が現在の余の立場と正確に一致しないといふことを指摘する必要は殆んどないであらう。主として、あるひは殆んど全然といつてもいゝのであるが、マルクスの努力によつて、科學として充分に發展した近代國際的社會主義は千八百四十四年には未だ存在してゐなかつた。余の著述はその初期の發達階段の一を示すものであつて、宛も人間の胎兒がその發達の初期において、人類の祖先たる魚類の總を未だに再生產してゐるやうに、この著述も到るところにおいて、近代社會主義の祖先の一たる獨乙哲學からの進化の迹を示してゐる。かくて、共產主義は勞働者階級の黨派的教義にあらずして、資本家階級をも包含しての社會一般を現今の如き窮乏の狀態から解放することに關する理論であるといふ命題に甚だ重きを置いたのであつた。このことは、抽象的にいへば、眞であるが、實際においては全く無用のことであり、ある場合においては一の損害を齎らす。富裕なる階級

が何等解放の必要を感せざるのみならず、勞働階級の自己解放に對して、頑强に反對する間、而して社會革命が獨り勞働階級によつてのみ準備せられ、飽くまで闘はれる間は然りである。千七百八十九年の佛蘭西ブルジョアジイもブルジョアジイの解放が全人類の解放たるべしと宣言したのであるが、貴族と僧侶はこれを解放することを欲しなかつた。この命題はその當時において、封建制度に關する限りにおいて一の抽象的歴史的眞理であつたが、そは直ちに單なるセンチメンタリズムに墮して、革命的闘爭の焔中にその姿を沒したのであつた。而して、今日、その優秀なる『公正』なる立場から、勞働者に對して、遙かに彼等の階級的利益と階級闘爭とを超越して、社會主義を說く人々こそ、未だ多くのものを學ぶことを必要とする初心者であるか、または勞働者の最惡なる敵――羊の皮を被つた狼かである。」（註三八）

六

マルクシズムは以上のやうに、階級闘爭の重要性を高唱し、その學說のプロレタリヤ階級性を强調するに拘らず、階級とは何ぞやの問題に關しては、マルクス＝エンゲルスは答へるところ甚だ少ないのである。少くとも體系的論述を缺いてゐる。マルクシズムの社會現象認識方法は現象の發展的形態と現象間の相互的關係において、現象を觀察する。即ち社會現象をその運動の態樣において觀察せんとするにあつた。この見地に立てば、階級闘爭なる社會現象は社會階級の本質を論ずる上において甚だ重要であるといはねばならぬ。たゞマルクス＝エンゲルスは階級闘爭理論を構成すること急にして、階級本質論に手を染めることが甚だ少なかつたのである。恐らく、マルクスをして數年の壽を保せしめれば、彼の階級理論はその古典的形態によつて吾々に殘されたであらう。資本論第三卷の最終章（第五十二章）は階級と題され、何が階級を形成するかの自問を提起し、何が階級を構成せざるかの議論の中ばに至つて、その原稿は永久に斷たれてゐる事實はこのことを吾々に語るものである。マルクスがその階級理論を體系的に完成しなかつたことは、彼の社會學說における階級の重要性が益々認識せらるゝだけ、返す返すも遺憾のことゝいはねばならぬ。

故にマルクスの階級本質論を研究しやうとすれば、吾々は彼の著述の諸所から斷片的記述を蒐集することによつて、これをなさねばならない。然るにマルクス

エンゲルスのいふところは種々に異つてゐるかの如くである。このことは既にツガン・バラノウスキ（註三九）もこれを指摘してゐるが如くであるが、これをもつてマルクスエンゲルスが明白なる社會階級概念を有してゐなかつたと論斷することは、少しく早計に失するやうに思ふ。余はこの點についてマックス・アドラアの所說に從ふものである。（註四〇）

マルクスはその資本論第三卷において、近代社會の階級の古典的型態を三つに分つてゐる。即ち、夫々勞銀、利潤及び地代を以て收入源泉としてゐる所の單なる勞働力の所有者と、資本の所有者と、土地の所有者、語を換へていへば、賃銀勞働者と資本家と地主――これ即ち資本制生產方法に立脚した近世社會の三大階級を構成する所のものである。」（註四一）この近代社會の三階級は古典的なる純粹の姿に過ぎないのである。「イギリスに於ては近世社會が其經濟的體制の上で、最も廣汎に、最も古典的に發達したことは、爭ふべからざる事實である。が、其樣なイギリスに於てすら、右の階級編成は純粹の形には示されてゐない。茲でも到るところ、中間的な過渡的な各種段階が限界決定を紛らはしくしてゐる。」（註四二）まして他の產業の未發達なる國においてはやである。マルクスは千八百四十八年の革命當時の獨乙の社會狀態を描いて、ニューウヨオク・トリビューン紙に寄書してゐるが、その中に當時の獨乙における階級狀態を可成に詳細に描いてゐる。封建的所有制度の殆んど到るところで行はれてゐた當時にあつては、封建貴族は甚だ勢力があつた。これに反して、獨乙のブルジョアジイは佛蘭西または英國のブルジョアジイほど富でもゐないし、集中もされてゐなかつた。（註四三）而して、國民の大多數は貴族にもブルジョアジイにも屬してゐないで、都市においては小商人階級と勞働者であり、地方においては、農夫であつた。（註四四）農夫階級は尙ほ幾多の小階級から成立してゐる。マルクスはこのことに關して次の如くいつてゐる。

「最後に小農と極小農との大階級がある。この階級は農業勞働者を加へて、全國民の大多數を形成する。乍併、この階級はまた種々なる小部分に細分せられる。第一に富裕なる農業者、獨乙において大農並に中農と呼ばるゝものである。彼等は多少共廣大な農場の所有者で各々數人の農業勞働者の勤勞を用ゐてゐる。この階級は租稅賦課を免れてゐる大封建的地主と小農勞働者の中間に位

してゐる。彼等が都會の反封建的中産階級と同盟を結ぶことは、その最も自然的な政治的經過として明かに理由がある。第二に佛蘭西大革命の巨大な打擊によつて、封建制度が征服せられたライン地方を支配してゐる小世襲地主がある。これと同等の獨立小世襲地主が以前その土地に存在した封建的諸義務を買收するのに成功した諸州には存在する。乍併、この階級は單に名目上においてのみ世襲地主の階級である。彼等の財産は一般に擔保に入れられて、且つその條件が非常に苛重なので、眞の地主たるものは、この小農ではなく、金を貸出した金貸業者である。第三に封建的小作人である。彼等は容易に借地から離れることが出來ない。而して彼等は永久に地代を支拂ふか、莊園（マナア）の領主のために永久に一定量の勞働に從事しなければならない。最後に農業勞働者であるが、彼等の狀態は、多くの大農場においては、英國の同階級と同一で、彼等は貧窮の間にその生を送り、その雇主の奴隷である。農業的人口の最後の三階級即ち小世襲地主、封建的小作人、農業勞働者は革命以前においては政治にその頭腦を費すことがなかつた。けれどもこの事件は彼等に對して、輝々たる前途ある新發展の過程を彼等の前に展開したのである。彼等のすべてに對して革命は利益を提供した。而して運動が一度巧みに行はれゝば、各人がその運動に參加することが期待され得る。乍併、農業的人口は廣大なる地積に散在し、その各部分間における一致を齎らすことの困難の結果として、嘗て成功した獨立運動を企圖することが出來なかつたことは、明白であり、近代諸國の歴史によつて均しく確證せられたことである。彼等は一層集中せられ、一層感動的の都會人士の創意的衝動を必要とする。」（註四五）

この引用文によつて明かであるやうに、マルクスは當時の獨乙における社會階級を分つて、封建貴族、ブルジョアジイ、小商人、勞働者、農民としてゐるが、更らに農民を大農、中農、小世襲地主、封建的小作人、農業勞働者の五つに細分してゐる。マルクスはまたその「ルイ・ボナパルト論」の中で二月革命前後の佛蘭西階級狀態を論じ、多くの階級別を擧げてゐるが、小市民を一の特殊的階級即ちブルジョアジイの「過渡的階級」とし、更らに他の場所においては、全市民をもつて再びブルジョアジイと解してゐる。（註四六）　小農民に關しても同じやうな論述をしてゐる。小農民は一の

特殊的社會階級であつて、佛蘭西帝政の成立に對しては決定的役割を演じたのである。故に「ボナパルトは一の階級、即ち佛蘭西社會の最大多數の階級である小農民を代表した」とマルクスはいつてゐる。然るに、同じ著書において、マルクスは小農民は一の階級を形成せずといつてゐる。「數百萬の家族がその生活方法、その利益及び教育を他の階級のそれと分ち得、且つ彼等と敵對するが如き經濟的生存條件の下に、生活する限りにおいて、彼等は階級を形成する。而して、小農の間においては、單に地方的關係が成立するに止まり、彼等の利害の同一性が、何等の共同、何等の國民的組織を彼等の間に發生せしめざる限りにおいて、彼等は階級を構成しないのである。」（註四七）「佛蘭西における階級闘爭」においても、大小ブルジョアジイの分類を繰り返し、大ブルジョアジイを金融的ブルジョアジイと工業的ブルジョアジイに分ち、「佛蘭西における内亂」においては、小ブルジョアジイを英語の用例に從つて、中産階級と稱し、小商人手工業者を意味するものとした。（註四八）

斯くの如く諸多の階級の列擧は、マルクシズムにおける階級をもつて、プロレタリヤ及びブルジョアジイの二つに限れるかの如く見てゐる最も卑俗なる見解を有するものにとつては、恐らく甚だしい昏迷に陷ち入るであらう。乍併、マルクスは既に引用した通り、資本家、地主、勞働者の三階級を近代社會の典型的三階級とするのであつて、これら以外に階級の存在を否定するのではない。ブルジョアジイ及びプロレタリヤの區別も資本制的社會における階級分岐の傾向を指示するに止まるのである。「ルイ・ボナパルト論」における小農階級論も一見、矛盾のやうに見えるけれども、階級構成の條件と階級構成の過程に關するマルクシズムの解釋によつて、大方解決するが如くである。これらの諸點を論述するに先き立つて先づ如何に階級が發達したかに關するマルクス＝エンゲルス説を研究するところがなければならぬ。

七

然らば、階級は如何にして發生したか。

エンゲルスはこれに答へていふ。

「社會が搾取階級と被搾取階級、支配階級と被支配階級に分れたのは、前代における生産の貧弱なる發達から生じた必然の結果であつた。社會の全勞働がす

べての人の生存に必要なるもの以外には、極めて僅かの餘剰しか產出しない間は、從つて社會全員の大多數が終日または殆んど終日勞働に從事しなければならない間は、社會は必然的に數階級に分たれるのである。即ち專ら勞役に服する大多數の人々の外に、直接生產から免れて社會の一般的任務即ち勞働の指揮、國家の事務、裁判、學問藝術等に從事する一階級が生ずる。故に階級の基礎をなすものは分勞の原理である。」（註四九）

社會的必要による分勞の結果が社會階級を發生せしめたとする說の外にエンゲルスは尙ほ他の階級構成の原因を說明してゐる。

「かゝる階級構成と並んで、今一つの階級構成が行はれた。農耕家族內における原始的分勞は、富が一定の階段に到達すると、一人乃至數人の家族外の勞働力を取入れることを可能ならしめた。……生產は大いに發展して今や人間の勞働力はそれ自身の單なる維持に必要なる以上を產出し得るに至つた。……こゝにおいて勞働力は一の價値を得た。けれども自己の共產體および是れの所屬する聯合體は何等使用し得べき過剩の勞働力を供給しなかつた。これに反して戰爭はこれを供給した。……しかし今までは戰爭の捕虜を利用する方法がなかつたので、彼等はたゞ撲殺されるのほかなかつた。もつと以前にはこれを人は喰つたのである。然るに今や到達せられた『經濟狀態』の階段においては、これらの捕虜は一の價値を得るに至つた。そこで人はこれを生かして置いてその勞働を利用した。……こゝに奴隸制度が案出された。」（註五〇）

かくの如く一方においては、一社會內における生產力發展の結果としての分勞とこの生產力の進步による外敵の奴隸化によつて階級は發生したのである。人間はその古代から階級を有してゐた。マルクスは「共產黨宣言」において「從來のすべての社會の歷史は階級鬪爭の歷史である」といつてゐるが、人間はその始めから階級を有したのではない。第十九世紀後半の原始社會の研究はこのことを明かにした。故にエンゲルスは右の「宣言」の著名なる文章に對して、原始共產制崩壞以後の社會の歷史なりと附註した。即ち記錄に殘つてゐる一切の社會は今日にいたるまで階級對立の社會である。然るにマルクス＝エンゲルスは古代並に中世の階級及び階級鬪爭に關する研究は手を染めることが甚だ少なかつたのである。

彼等の階級研究は主として資本制的社會における階級である。主としてブルジョアジイとプロレタリヤとに關する研究である。彼等は近代資本制的社會において、この二大階級のみを認めやうとするのではない。これらの階級以外の階級は資本制的社會の進展と共に兩者の何れかに屬するに至り、資本制社會の最も發達したところには、これらの二大階級が相敵對する陣營に分れる。故に彼の社會學的考察は主としてこれらの二階級に向けられてゐるのである。

こゝにいふプロレタリヤ及びブルジョアジイとは何を意味するか。エンゲルスはその語源的意義を「空想より科學への社會主義の發展」の英譯版に次のやうに説明してゐる。「封建時代の初期においては手工業を行ふ特權を領主から得た隷農は舊主の城下の一地點または領主の武士がその上で日夜見張をする城壁や塔によつて外敵の攻擊から防禦されてゐる一地點に移住した。かくて形造られ、防衛された町は佛蘭西語では bourg 獨乙語では Burg スコットランド語では burgh 英語では borough と呼ばれた。そこに住んでゐる正當の資格のある工匠、工人及び商人はブルジョアと呼ばれ、團體としてはブルジョアジイと呼ばれた。時の經過と共に多くの町は單獨でまたは團結的に各々領主の强請に反抗し得るだけ强大となつた。而して領主同志または國王との闘爭において勢力の弱つてゐる場合には、その獨立を確保したことすらある。それのみならず、町と町との間の生産物の交換が發展し始めると、工匠と商人とはその商品に對する增加した需要を充たすために、他人の勞働をも必要とする。この勞働は全然領主の自由にされてゐた田舍の隷農によつて熱心に充たされた。彼等の多くは束縛されてゐる許りでなく、餓死しさうな、豐饒な田園から逃れて、町に避難し、そこで彼等の以前の仲間の隷農に使はれて、幾何かよい生活をし、幾何かの自由をも得た。かくて奪掠的の商人階級であるブルジョアジイの形成と共にプロレタリヤと名づける被奪掠的賃銀勞働階級が起つて來た。即ち彼等の勞働力以外に何ものをも所有せず、その生活を維持し、その子孫を生むためには、勞働力を賣らなければならない所謂自由人の階級が起つて來たのである。プロレタリヤといふ語はラテン語の proles から起つて來たので、子孫を意味する。この語は初め、ロオマにおいて所有物の皆無なるに拘らず、國家に對して子孫を生むといふ價値があるといふので、セルヴィユス・ツリ

ウスの國勢調査中にproletariiとして數へられた階級に用ゐられたのである。」（註五一）

エンゲルスは尙ほその共產黨宣言草案の中で兩階級を定義してゐる。即ち「すべての文明國において、すべての生活資料とその產出に必要なる原料並に器具（機械及び工場）を既に排他的に所有してゐる大資本家の階級がある。これがブルジョア階級またはブルジョアジイである。」（註五二）「プロレタリヤとはその生活維持を單にその勞働の販賣のみから得てゐて、ある資本の利潤から得てゐない社會階級である。その幸福もその悲哀も、その生死も、その全體の生存も勞働に對する需要に依存し、景氣不景氣の變化により、無拘束な競爭の動搖に依存してゐる階級である。一言にしていへば、プロレタリヤまたはプロレタリエル階級は第十九世紀の勞働者階級である。」（註五三）この定義は言源的定義に對して、發達せるプロレタリヤ並にブルジョアジイの定義である。即ち產業革命の經過中に發生した兩階級についての定義であり、前の定義及發達過程における兩階級の定義である。

ブルジョアジイは近代社會における發達である。「アメリカの發見、希望峰の廻航は、この新興のブルジョアジイに對して新らしい地盤を作つたのであつた。」（註五四）

而してブルジョアジイの發達はこれを二期に分つて見ることが出來る。即ちブルジョアジイが封建制度と專制王國の制度の下において、階級として構成されつゝある第一期と、既に階級として構成せられ、社會をブルジョアジイの社會たらしむべく封建主義と王制とを顚覆した第二期である。（註五五）「共產黨宣言」においては、こゝにいふ第一期を二分して、初期のブルジョアジイと工場的手工業時代のブルジョアジイとし、第三期を近代機械生產並に世界市場發見以後のブルジョアジイとしてゐる。（註五六）

ブルジョアジイの發達はまたプロレタリヤの發達である。ブルジョア的生產はプロレタリヤ的人的要素を必然に發達せしめる。エンゲルスが英國について研究したところによるとプロレタリヤの種別による發達は先づ製造工業勞働者、次に製造工業に原料と燃料とを供給すべき產業の勞働者、次に工業によつて影響された農業における勞働者、第四にアイルランドからの移住勞働者である。（註五七）而して普通にプロレタリヤといふ場合には製造工業の勞働者を意味することはエンゲルスの定義の如くである。而して、プロレタリヤの發達はブルジョアジイ

の發達と伴つて、手工業制、工場的手工業制、機械工場制の生產の發達過程に伴つて發達する。（註五八）　即ち、「ブルジョアジイ――資本が發達すると、その同じ割合をもつてプロレタリヤ即ち近代勞働者階級が發達する。このプロレタリヤは勞働を見出した間だけ、生活することが出來、またその勞働が資本を增大する間だけは仕事を見出すことが出來る。勞働者は自身を切賣しなければならないので、あらゆる商品と同じく一個の商品である。從つて競爭上の諸變化と市場內の諸變動とに晒らされるのである。」（註五九）　プロレタリヤは自己の勞働力以外の何ものも所有しない。彼は全く自由である。近代プロレタリヤの特徵とするところは彼等が二重の意味において自由である點である。マルクスはこの點を說明して次の如くいつてゐる。「貨幣の資本化については、貨幣所有者が商品市場に自由なる勞働者を見出すといふことが必要な條件となるのであつて、この自由といふことには二重の意義がある。即ち勞働者は一方に自由なる人として、彼れの勞働力を彼れの商品として支配すると同時に、一方また他人に販賣すべき何等の商品をも所有せず、徒手空拳、彼れの勞働力の實現に必要なる一切のものから自由となつてゐるのである。」（註六〇）

これが近代社會におけるブルジョアジイ及びプロレタリヤの狀態であつて、彼等は互に相敵對して階級鬪爭を行つてゐるのである。而してブルジョアジイは今や支配階級として榮えてゐるのである。

八

階級發達の過程は以上の如くであるが、何が階級を構成するかの問題が未だ殘されてゐる。マルクスは既に述べたやうに、「資本論」第三卷第二冊の最終の章で現代資本制社會の階級を地主、資本家、勞働者に分ち、何が階級を構成するかの問題を起してゐるが、彼は自らこの問題に對して答へることがなかつたのである。マルクスはこれに續く文章において、たゞ職業が階級と看做さるべきでないといつたに過ぎない。醫師、辯護士、藝術家等の職業はそれ自體では、一の特殊階級を形成するものではないと同樣に、社會的分勞の結果成立した利益並に所有範疇も階級を形成するものではない。故に鑛山所有者、葡萄園の所有者、森林の所有者も、石工も大工も纖維工業勞働者も煙草製造勞働者もそれ自體においては階級ではない。

何故に然るかはマルクスは判然答へるところがないのである。たゞ前述の所論から推すと職業並に所有の區別は階級別の標準とはならない。また經濟的過程の內部において種々なる相互關係による地位を有してゐる勞働者の團體または特殊の所有をとつて見ても、そは階級を構成しない。煙草製造勞働者も纖維工業勞働者も同じ經濟的條件の下に、賃銀に對してその勞働力を賣り、同じ方法で餘剩勞働を施行する。企業者團並に土地所有者に對する彼等の生產的行動から起る地位は同一である。資本家についても、このことは同樣である。彼が鑛山、炭坑、煉瓦、煙草製造にその資本を放下してゐても資本家たる地位については同一である。然るに工業家、商人、銀行家は同一の資本家ではあるが、資本制的經營の內部においては、種々な經濟的機能と異つた地位を有してゐる。階級區別の標準として職業が用をなさないやうに、所有の大小、所得の大小もまた用をなさない。農民または手工業者の收入並に生活狀態は時としてよい地位の工業的勞働者よりも高くはない。故に、彼等は勞働者階級に屬するものと主張する人がある。または小商人の營業は何ものも彼に屬してゐない。彼は負債を負つて働いてゐるのに過ぎない。故に彼もまた勞働者であると。マルクシズムの階級論は斯くの如きことを主張するのでない。（註六一）

マルクシズムの階級本質論を研究しやうとすれば、マルクス社會觀の根本に溯つて、研究することを要する。マルクスはその「賃銀勞働と資本」の中に次の如くいつてゐる。「生產において人は自然に對して作用するのみならず、人間相互に作用する。彼等は一定の方法において協働し、また相互にその行爲を交換することによつてのみ生產する。生產するためには、彼等は一定の連絡と關係とに入る。これらの社會的連絡と關係の範圍內においてのみ、彼等は自然に作用し、生產が行はれる。生產者の入り込むこれらの社會的關係並に彼等がその行爲を交換し、生產の集合的行動に參加する條件は生產手段の性質に從つて異る。……個人がその內において生產する社會關係、即ち社會的生產關係は物質的の生產手段即ち生產力の變化と發展に從つて變化する。生產關係の全體が吾々の所謂社會關係、即ち社會を構成し、一定の歷史的發展階段における一の社會、即ち固有の、特殊的性質を有する一社會を構成するのである。」（註六二）

斯くの如く社會をもつて經濟的生産の所産とした點からいへば、社會階級も當然生産關係における特定關係たることは言を俟たない。從つて、マルクスが地代、利潤、勞銀の獲得者たる地主、資本家、勞働者の三大階級を區別したことによつて、所得の源泉に、階級區別の本質を求めやうとすることが當を得てゐないことは、マルクス自身既にいつたところである。(註六三)　而して、彼の社會觀上における所得分配の地位について見ても、このことは明かであらう。然らば、マルクスは所得分配の現象を如何なる社會的現象として見たか。「生産は生産の對立的規定における生産自身を包攝すると同樣に、他の諸契機をも包攝する。過程は常に生産から新たに始まる。交換と消費とが包攝者であり得ないことは、おのづから明かである。同樣にその事は生産物の分配としての分配にも當てはまる。しかし生産要因の分配としては、分配自體が生産の一契機である。だから生産の一定〔の形態〕は、消費、分配、交換の一定〔の形態〕を規定し、これら種々なる諸契機相互間の一定の關係を規定する。」(註六四)「吾々が生産と消費とを一の主體の或は個々の個人の活動として考察するならば、それらは常に、一の過程――そこでは生産が現實の出發點であり、それ故にまた生産が包攝的な契機である――の契機として現はれるといふ點である。」(註六五)「分配關係及び分配樣式は、たゞ生産要因の反面としてのみ現れる。賃勞働の形態において生産に關與する個人は、勞賃の形態において、生産の結果たる生産物の分配に與かる。分配の組織は完全に生産の組織によつて、規定される。分配はそれ自體が生産の生産物である。」(註六六)

かくて生産は經濟生活――從つて社會生活のすべての方面を支配するのである。この見地に立脚すれば、社會階級もまた社會的生産過程における一産物である。階級は生産における生産手段の分配の狀態及びこれによつて起る生産社會の成員の編成から成立するものである。故にエンゲルスは階級發生の原因を生産力の不足に求めてゐる。「社會が搾取階級と被搾取階級、支配階級と被支配階級に分れたのは、前代における生産の貧弱なる發達から生じた必然の結果であつた。」(註六七)

故に貧富の差別といふが如きは、階級區別の本質を形成するものではない。勿論マルクス主義的著作においても、所有及無産の二大階級なる言語を用ゆること

は屢々であるが、そは富者及び貧者の對立を意味するのではなく、生産手段の所有者に對して、勞働力以外の何ものをも所有しない人々をいふのである。

九

生産における各人の地位が階級を形成するといふのは、階級の内容であつて、その形態ではない。階級の形態は社會的意識一般の形態によつて決定せらるゝのである。（註六八）　こゝに階級意識が問題となる。階級は經濟的概念としては、一社會形態の編成である。而してこの一社會形態の編成とその觀念體とは不可分のものであるが故に階級と階級意識ともまた常に相伴ふものである。この見地から見るとき、既に引用したマルクスの佛蘭西小農が階級を構成せずといふ命題はこれを解するに困難ではない。當時の佛蘭西小農はマルクスの見るところにすれば、未だ階級としての意識を所有してゐなかつたことによるのである。このことは「哲學の窮乏」の中においても説明されてゐる。「經濟上の事情は、先づ多數人民を勞働者に轉化せしめた。資本の支配は、これらの人民に共通の位置、共通の利害を生ぜしめた。されば、これらの人民は、資本に對立しては既に一の階級となつてゐるのである。けれども、彼等自身にとつては、尚ほ未だ階級たるものではない。上に二三の段階だけについて特徴を示したところの闘爭をなすに及び、これらの人民は茲に初めて相結合し、彼等自身にとつても一の階級を構成するものとなるのである。彼等が擁護するところの利益は階級利益となる。が、階級對階級間の闘爭は一の政治的闘爭である。」（註六九）

「共産黨宣言」における「プロレタリエルの階級への組織從つて政黨への組織が勞働者の競爭によつて、直ちに再び破壞せらるゝ」云々（註七〇）及び共産主義の眼前の目的の一としての「プロレタリエルの階級への組織」（註七一）における「プロレタリエルの階級への組織とは前引用文における「人民に共通の位置、共通の利害」を意識せしめて、この意識を全國的にすることである。またはこれを全世界的にすることに外ならぬ。もしも斯くの如く解さないならば「萬國の勞働者に結合せよ」（註七二）との共産黨宣言最後の章句は無意義となるのである。

故に階級とは社會的生産における同一の地位によつて條件づけられた人間集團であつて、その利害の共同を意識せるものをいふのである。この見地からすれ

ば、階級支配の本質を經濟的搾取のみに見て、經濟的搾取がなければ、一方においては階級支配は不可能となり、他方においては、搾取せらるゝ集團は階級としての存在を廢棄し、從つて、階級として抑壓せらるゝことなしとするのは誤謬である。經濟的搾取は單に階級發生の契機である。經濟的搾取から成立した階級はその大衆に對して、その共同利益によつて作られた觀念によつて、共同利益を現實化し、固定化し、更新的傾向を與へることによつて、社會的構成體となるのである。もしも、プロレタリヤが勝利を得、一擧にして經濟的搾取を廢止し、全私有財産を社會化したと假定しても、そこには尙ほブルジョアジイは存在する。何となればこの階級の物質的活働の廢止と共に、直ちにブルジョアジイの利害の精神的狀態即ち意識が消滅することがないからである。かく見來ればプロレタリヤ國家を本來の國家即ち階級國家と見るに毫も妨げないのである。（註七三）

階級の本質を以上の如くであるとすれば、この階級と獨乙語にいふ「シュタンド」との差異は、如何。マルクスはその初期の著作においては、階級（クラッセ）とシュタンドとを區別することがない。例へば、「獨佛年誌」に寄稿した「ヘエゲル法律哲學批判」（一八四四年）においては兩語を同義語として使用してゐる。然るに一八四七年の「哲學の窮乏」においては兩語の意義を嚴密に區別して用ゐてゐる。社會的勞働並に經濟過程からすべての階級は一の社會的制度即ち社會階級を構成することは既に述べたが、一階級の他の階級に對する關係は一般的にいつて、一の社會的關係である。然るに國家は社會階級の組織を國家的制度として認め、特殊階級に對して特別の政治的權利並に義務を認めることによつて、國家的身分制度（シュタンドオルドヌング）を形成する。要するにシュタンドとは國家によつて認められた特殊の政治的權利と義務とを享有する集團を指していふのである。この意味に「市民的社會の第三シュタンドの解放の條件がすべてのシュタンドの廢止にあるが如く、勞働者階級の解放の條件はすべての階級の廢止である」（哲學の窮乏）といふのである。即ち一は政治上、國家組織上の意味に用ひられ、一は社會的意義に用ゐられてゐるのである。何となれば、勞働者は社會階級ではあるが、政治的には何等の權利も有さない階級だからである。

故にマルクスに對しては、「アルバイタア・シュタンド」なる言葉は何等の意味を持

たないのである。然るにラッサルはその「勞働者綱領」において、勞働者階級をアルバイタア・シュタンドと呼んでゐる。これマルクスがエンゲルス宛書翰（一八六三年一月二八日）の中でこのことを非難して「共產黨宣言」の俗化なりといつたのである。（註七四）乍併、マルクス自身も「共產黨宣言」において、すべての從來の社會の歷史は階級鬪爭の歷史である」といつて、古代及び中世の諸階級を擧げてゐるのであるが、これは明かに當時におけるシュタンドであるのである。この意味において、「宣言」を非難する學者も存するのであるが、たゞシュタンドと階級とはその本質においては、シュタンドが階級の一の現象形態であることによつてその記述の價値を減ずるものではないといふことを得るであらう。（註七五）

附記　筆者は數年前（大正十一年）「マルクス主義の社會階級論」と題する一篇を本誌に掲載を乞ふたのであるが（第十六卷第十一、十二號）本稿は既載論稿に對する一の增補である。數年前の論稿素より不備ではあるが、今これに對する訂正論稿も內容甚だ整はざるは筆者の最もよく知るところである。記して編輯者並に讀者の諒解を俟つ。（千九百二十八年四月十七日稿了）

註

一　加田哲二著　近世社會學成立史第二章及び第三章參照
二　Heinrich Cunow, Die Marxsche Geschichts-, Gesellschafts- und Staatstheorie. II. Bd. Ss. 82-89. 加田哲二社會學概論　第九章（大思想エンサイクロペディヤ　社會學篇五月刊行所載）
三　拙稿　社會學概論第九章及び第十章
四　Ferdinand Tönnies, Gemeinschaft und Gesellschaft. 拙稿　社會學概論　第七章
五　R. M. Mac Iver, Elements of Social Science. p. 67.
六　Emile Hammacher, Hauptfrage der modernen Kultur. Leipzig. 1914. S. 159.
七　Othmar Spann, Kurzgefasstes System der Gesellschaftslehre. 1914. S. 119.
八　Overbegh, La classe sociale, 1905.
九　Pesch, Lehrbuch der Nationalökonomie. I. 1905. S. 71.
一〇　Schäffle, Bau und Leben des sozialen Körpers 1896. I. Bd. S. 92.
一一　Bernstein, Was ist Sozialismus? 1900. S. 12.
一二　Simkhovitsch, Marxismus gegen Sozialismus. 1913. S. 127-128.
一三　Max Weber, Wirtschaft und Gesellschaft. S. 177.
一四　Heinrich Cunow, Die Marxsche Klassenkampftheorie Die Neue Zeit. 37. gahrg. Bd, 2. 1919. S. 272.
一五　Werner Sombart, Der proletarische Sozialismus Bd. I. Ss. 351 ff.
Sombart, Der moderne Kapitalismus 2. auft. Bd. 2. Teil 2, S. 1091.

一六　Sombart, Sozialismus und soziale Bewegung 1919. S. 1.

一七　Schmoller, Die soziale Frage. 1918. S. 142.

一八　この一項　Paul Mombert, Zum Wesen der sozialen Klasse, Ss. 240-243. (Hauptproblem der Soziologie Erinnerungsgabe für Max Weber II. Bd) による

一九　拙著　近世社會學成立史　第三章

二〇　Gerhard Albrecht, Die sozialen Klassen. 1926. Ss. 15 ff.

マルクス階級闘爭說の先驅に關しては

平井新　マルクス階級闘爭起源考(三田學會雜誌第十九卷第十一號) Cunow, Zur Geschichte der Klassenkampftheorie (Jahrbuch für Soziologie II. Bd) 平井新　階級闘爭說に於けるマルクスと其の先驅者(三田學會雜誌第二十卷第八號)參照。

二一　Adam Ferguson, An Essay on the History of Civil Society. 1766.

二二　Caetano Filangieré 1752-1788. La scienza della legislazione 1780-1788 3 Bde.

二三　フアグスン以下サン・シモンに至るまでの學說は大體 Albrecht, Die sozialen Klassen. Ss. 19-22. に據る。

二四　Friedrich Engels, Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft. 7. aufl. 1920. S. 34.

二五　Marx u. Engels, Das kommunistische Manifest. Kautskys Ausgabe. 1922. S. 44.

二六　Engels' Introduction to the english edition of Communist Manifesto. 1888. Kerr ed. 8.

二七　平井新「共產黨宣言」翻譯問題　三田學會雜誌第十九卷第六號

平井新　コンシデランの「社會主義原理」第十九世紀民主主義宣言」飜譯　同誌第二十二卷第四號

二八　Marx u. Engels, Kommunistisches Manifest. Ss. 25-37.

二九　Marx u. Engels, op. cit. Ss. 25-26.

三〇　Marx u. Engels, op. cit. S. 26.

三一　Marx u. Engels, op. cit. Ss. 31-32.

三二　Marx u. Engels, op. cit. S. 36.

三三　Marx u. Engels, op. cit. S. 45.

三四　Marx u. Engels, op. cit. Ss. 18-19.

三五　Franz Oppenheimer, Das Grundgesetz der Marxschen Gesellschaftslehre. Ss. 146-147.

三六　Simkhovitsch, Marxism versus Socialism. p. 186.

三七　Engels, Grundsätze des Kommunismus. 1921. S. 9.

三八　Engels, Condition of the Working Class in England in 1844. Preface of 1892. p. X.

三九　Tugan-Baranowsky, Theoretische Grundlagen des Marxismus. 1905. Ss. 20-31.

四〇　Max Adler, Staatsauffassung des Marxismus. VII. Kapitel.

四一　マルクス　資本論　第三卷下　高畠素之譯　新潮社版　五八四頁

四二　資本論　第三卷下　五八四頁

四三　Marx, Revolution and Counter-revolution or Germany in 1848. Social Science Series edition. p. 4.

四四　Marx, Revolution and Counter-revolution. p. 7.

四五　Marx, Revolution and Counter-revolution. pp. 10 11.

四六　Marx, Der achtzehnte Brumaire des Louis Bonaparte, 4. Aufl. S. 49 u. 50. zihert von Cunow, op. cit. II. Bd. S. 54.

四七　Marx, Der achtzehnte Brumaire. S. 97. Ciziert von Tugan-Baranowsky, op. cit. Ss. 22-23.

四八　Marx, Klassenkämpfe in Frankreich 1848-50. Der Bürgerkrieg in Frankreich. 1871. Ciziert von Cunow. op. cit. II. Bd. S. 54.

四九　Engels, Entwicklung des Sozialsmus. S. 49.

五〇　Engels, Dührings Umwältung der Wissenschaft.

五一　反デューリング論　河野密林譯　二九五——二九六頁

五一　Engels, Historical Materialism. Socialist Labour Party Edition. pp. 4-10.

五二　Engels, Grundsätze des Kommunismus 1921. S. 11.

五三　Engels, Grundsätze. S. 9.

五四　Kommunistisches Manifest. S. 26.

五五　マルクス哲學の窮乏　高畠素之譯　二二九頁

五六　Kommunistisches Manifest. Ss. 26-27.

五七　Engels, Condition of the Working Class in England in 1844. p. 19.

五八　Engels, Grundsätze. Ss. 9-10.

五九　Kommunistisches Manifest. Ss. 31-32.

六〇　マルクス　資本論第一卷　高畠素之譯　改造社版　一四〇頁

六一　Cunow, op. cit. II. Bd. Ss. 55-56.

六二　Marx, Lohnarbeit und Kapital, Kautskys Ausgabe. S. 25.

六三　資本論第三卷下　五八五頁

六四　Marx, Zur Kritik der politischen Oekonomie, Einleitung. 經濟學批判序說　宮川實譯　三四——三五頁

六五　マルクス經濟學批判序說　二四頁

六六　マルクス經濟學批判序說　二五頁

六七　Engels, Entwicklung des Sozialismus. S. 49.

六八　Adler, Staatsauflassung des Marxismus. S. 99.

六九　マルクス　哲學の窮乏　高畠素之譯　二二八——二二九頁

七〇　Das kommunistische Manifest. S. 34.

七一　Das kommunistische Manifest. S. 38.

七二　Das kommunistische Manifest. S. 56.

七三　Adler, Staatsauffassung. S. 104.

七四　Cunow, op. cit. II. Bd. Ss. 61-64.

七五　Adler, Staatsauffassung. Ss. 102-103.